

組織論における市場概念

The concept of Market in Organization studies

矢 寺 顕 行

分 野：経営組織論、経営戦略論

キーワード：市場、制度、組織フィールド、アレンジメント

I. はじめに

市場における取引に関して、経済学では経済的に合理的な計算を行う個人が想定されてきた。この行為者モデルを援用する議論は経営学では少なくないが、このような前提に対し、経済社会学に依拠した経営学の領域の研究では、取引に影響を与えるネットワーク、信頼、文化といった非経済的要因を検討することによって、この行為者モデルを批判してきた。例えば、雇用におけるネットワークの役割（Granovetter,1974；渡辺,2002）や企業間取引におけるネットワークや信頼の役割（若林,2006；小橋,2008）といった研究は、経済学的な前提からは捉えることのできない、取引における非経済的な側面の重要性を明らかにしている。

しかしながら、上記の研究は、ある財・サービスに関する交換の場、あるいは企業間の競争の場として捉えられる、経済学的な市場概念¹⁾を前提としたうえで、取引や競争の分析を行ったものである。このような前提に立つ限り、どのような財やサービスが取引の対象となる価値を持つようになり、どのようにして行為者は取引を行うことが可能なのだろうか（Callon and Muniesa, 2005）、また、競争相手は誰であるのか、その市場の範囲はどのようにして決定されるのか（石原, 2007）という問題、すなわち、市場における行為の問題や市場の捉え方自体が持つ問題は十分に検討されてきたとは言いがたい。

1) 経済学的といっても、経済学において明確に市場が定義されたものではなく、その定義はあいまいに捉えられてきたことが指摘されている（Hodgson, 1988）。

そこで本小論では、市場という概念がもつ意義とそれを踏まえたかたちで取引や競争といった企業行動を分析するための枠組みの構築を目指して、市場を捉えるためのアプローチのいくつかを検討していきたい。具体的には、経済社会学の主要なアプローチのひとつである社会構造論(社会ネットワーク論、埋め込みアプローチ)を批判的に検討し、このアプローチが抱える問題を解決しうる方法として制度として市場を捉える視角をみていく。

II. 社会構造としての市場

新古典派的な市場に対する批判は多くなされているが、その中でも市場の研究として重要と思われるものは、市場を社会構造として捉えようとする試みである。この試みは、Granovetter (1985) を嚆矢として「新しい経済社会学」とか「埋め込みアプローチ」と呼ばれ、市場の社会学においては主流のアプローチとなっている(Swedberg, 1994)。また、分析方法として用いられる社会ネットワーク分析の発展の始まりとなるものである。

人間行動の裏にある分析のためには、過少社会化と過剰社会化の観念という理論的極端さに内在する原子化を回避することが必要である。・・・(中略)・・・行為者の目的的行為の試みは、具体的で、進行する社会関係のシステムに埋め込まれているのである(Granovetter, 1985: 邦訳, p. 247)

現実の経済行為は少なからず社会的な影響のもとで行われており、そのような影響を分析する必要があるというのが、Granovetterの主張である²⁾。埋め込みという概念は「経済行為と経済的結果は、すべて社会行為の結果のように、行為者の二者間の関係、そして、諸関係のネットワーク全体の構造に影響

2) 彼の批判の対象は経済学だけではなく、規範や慣習が社会化を経て個人に内化されることを前提として経済行為を分析する、これ以前の社会学的研究にも向けられている。社会学的研究においては、個人が社会的規則や慣習を内面化することを前提としていることを過剰社会化されているとし、経済学と社会学は方向性を異にしているものの、個人が原子化されているという点で共通していると批判する(Granovetter, 1985)。

されるという事実」(Granovetter, 1992)と定義され、「経済活動がどの程度社会関係や社会制度に媒介されているのか」という問題に焦点があてられる(渡辺, 2002)。同様の考え方として富永(1997)は、経済システムが社会システムの中に内包されていると位置付けて、経済行為が経済学で考えられているように厳格な最大化原理と自己主義に基づく行為というよりも、自己と他者との関係の中で行われる社会的行為として理解する必要があると主張する。

特に、Granovetterが注目したのは社会関係への埋め込みである。社会関係は実際の経済行為に影響を与えているとする。この具体的な事例として挙げられるのが、グラノヴェッターの一連の転職研究である(Granovetter, 1974)。転職活動において個人は人的つながりを活用する。所謂「弱い紐帯」の仮説である。ここでは、この人的つながりが経済行為としての転職に影響を及ぼしているということが示される。すなわち、個人が本来的にもつ利益の最大化という動機から経済行為が導かれていると考えるのではなく、人的つながりの影響を踏まえて分析を行わなければ、経済行為を理解することはできない、ということである。

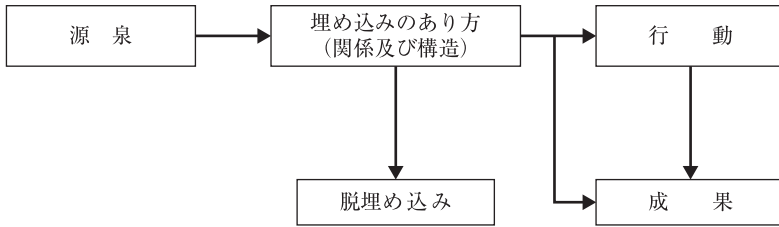
より直接的に市場に対してこのアプローチを応用したものとしてはWhite(1981)が挙げられる。彼は明確に市場がネットワークであると主張する。すなわち市場とは、「互いの行動の観察から役割を発展させる企業とその他のアクターのクリークからなる社会構造」と定義される(White, 1981: pp.518)。この定義によれば、行為者は独立した存在ではなく、経済的交換に際し相互にその行為を観察し、行為する。そういった社会ネットワークとして市場は捉えられるのである。安田(1996)によれば、社会ネットワークによって定義される市場研究(「市場の社会構造理論」と呼ばれる)の主な目的は、(1)どのような内部構造(同一の財・サービスの生産者が持つネットワーク構造)を持っているのか、(2)どのような外部構造(市場間の取引の相互依存関係)に埋め込まれているか、(3)外部構造によってどの程度拘束されているか、(4)それらの社会ネットワークの構造特性が市場のパフォーマンスにどのような影響を与えているか、といった分析である。ここで、社会ネットワークによる「拘

束」とは、「行為者を取り巻く外部から何らかの力が働き、意思どおり自由に行為を営むことができない状態」であるとされる(安田, 1996: p. 39)。行為者を取り巻く外部とは、彼を取り巻く社会ネットワークを意味する。

この「拘束」概念のように市場の社会ネットワークの特性から行為者ないし企業のパフォーマンスを分析しようとするものとしては、Burtによる構造的空隙(structural hole)の研究がある(Burt, 1992)。社会ネットワーク分析では、第三者として、それまで存在していなかった関係を他者の間に成立させる可能性がある状況に、仲介という機会が存在すると考えられている。この第三者というネットワークの構造的特徴に着目し説明を加えたのが、Burtである。Burt(1992)は、Simmelが、第三者が異なる2つのグループの間の緊張を利用し、「漁夫の利」を得ることがあるという主張を援用し、漁夫の利を得るための条件について社会ネットワークの視点から説明した。このネットワーク構造上の位置が構造的空隙とよばれるものである。構造的空隙とは、「2つのコンタクト間の重複しない関係」と定義される(Burt, 1992)。構造的空隙は、2つのグループの間の情報の流れを仲介できる機会であり、また、その2つのグループをコントロールすることのできる機会である(Burt, 2001)。第三者はこの機会を活用し、「情報」を異なる2つのグループに伝達することによって利益を高めることができるとされている。

このような社会構造から市場をとらえようとする理解がもたらす意義は、社会関係という社会的要因を分析の射程に含めることによって、より現実に近い経済行為の理解が可能となることである。しかしながら、埋め込みアプローチにおいても問題がないわけではない。その問題とは、第一に、社会構造による決定論的性格を持っていること(Fourcade, 2007)、第二に、このアプローチが考える社会的側面ということがあまりにも狭いこと(Lie, 1997)などがあげられる。埋め込みアプローチが因果関係の説明であることは、Dancin, Ventresca and Beal(1999)の埋め込みに関する包括的なレビューと彼らの議論に関する小橋(2008)の論考に明確に示されている。小橋(2008)は、埋め込みアプローチの説明図式を図表1のようにまとめている。

図表1 埋め込みアプローチの説明図式(小橋, 2008:pp.142及び、Dancin et al., 1999)



ここでこの図表を紹介したのは、埋め込みアプローチがネットワーク決定論という性格を持っているということ主張したかっただけであるが、本論文において触れられなかった変数について、説明を加えておこう。まず、源泉とは、「埋め込み」がどのような原因から生じるかに関するものである。しかし、Granovetterの主張に従うならば、行為者は本来的に埋め込まれた状況にあるのであって、源泉を問うということは、行為者が「真空状態」におかれていたことを想定させるとして小橋は批判する。埋め込みのあり方は、行動とその結果に影響を及ぼす要因であり、関係と構造に分けられる。関係とは行為者間の関係の期間とかGranovetterの研究における接触頻度で測定されるような「紐帯の強さ」など、関係の内容に相当するものである。構造とは、ネットワークの位置を示すものでBurtのいう「構造的空隙」のように構造上の位置関係を示すものである。脱埋め込みとは、埋め込まれている程度と埋め込みの変化についての変数である。

このように因果関係の説明は、ある変数が設定され、それに規定される形で経済行為が決定される。すなわち、研究者があるネットワークの構造や関係のあり方を特定し、あるいは文化的な要因を特定すると、それに応じて経済行為のあり方が規定されることである。すなわち、構造決定論的な説明になってしまうのである。埋め込みアプローチはそもそも経済学的アプローチが経済行為の動機を分析的に研究者が設定してしまっていたこと(過小社会化)、また、社会学が文化や規範を個人に内在させること(過剰社会化)で行為を規定していたことへの批判から生じていた。しかしながら、ネットワークという埋め込み

先の要因を変数としてモデルに組み込むという方法をとってしまうと、これまで批判していた方法と変わらない決定論になってしまうのである。

第二の批判は、埋め込み概念を社会関係に限定して論じることへの批判である (Lie, 1997)。そもそも埋め込みという考え方は、社会関係に限らず、様々な社会的要因のもとで経済的行為ないし市場をとらえようとする試みであった。Granovetter 以来、社会関係への埋め込みが強調されるようになったが、Granovetter が参照した Polanyi による埋め込み概念を見てみると、経済と社会の関係の在り方がわかる。

人間の経済は、経済的な制度と非経済的な制度に埋め込まれ、編みこまれているのである。非経済的な制度を含めることが肝要である。なぜかと言えば、宗教や政府が、貨幣制度や、労働の苦しみを軽減する道具や機械そのものの利用可能性と同じくらいに、経済の構造と機能にとって重要となることもありうるからである。(Polanyi, 1957: 邦訳, p. 373)

Granovetter (1985) の埋め込み概念はポランニーの埋め込みの考え方を修正したものであるが³⁾、経済人類学の文脈でのポランニー理解は、Granovetter が提示したものと異なっている。Granovetter が修正したと言われる根拠は、この埋め込みが非経済社会だけではなく現代の経済社会にも埋め込みが存在すると主張したことにある。この理解のもとには、ポランニーが、経済社会が他の社会的な諸制度から乖離したものだとして主張したというポランニー解釈がある。しかしながら、ポランニーが主張したのは、そのような非経済的諸制度から乖離したように機能する市場、及びそれを客観的、形式的な形で分析しようとする経済学に対する批判であった。

3) Granovetter のこの解釈を修正したと考える立場と、誤解しているとする立場の両方が存在する。修正したとしているのは埋め込みアプローチを採用する人々であり、誤解しているとするのは、たとえば Callon (1999)、Owen-Smith and Powell (2008) があげられる。彼らは埋め込みをより広い考え方として受け止め、かつ決定論的性格を批判する。

環境としての社会や制度と行為者の相互作用を前提とすれば、経済だけを個別に取り出して分析する形式的理解は誤りとなる。この様な前提を現在の経済行為⁴⁾にあてはめると、経済行為を行っている行為者だけではなく、彼らを取り巻く諸制度との間の相互作用を捉えなければならない。ここで経済行為を取り巻く社会的な要因を含めて考えるということは、埋め込みアプローチに見られたように、ある変数を随伴的なものとして枠組みに加えて捉えるということの意味しているのではない。ポランニーが「相互作用」と明記しているのは、経済と社会的諸制度は、関係性の中で捉えなければならないということである。つまり、行為者の視点から彼を取り巻く諸要素間の相互作用を見ることが、関係性をとらえるということである。

このような視点を分析枠組みに導入するならば、市場におけるネットワークの構造を見出し、社会関係の他、文化や政治、技術といった社会的要因を含めたとしても、因果関係としてそれを示すことを目指した社会ネットワーク分析のアプローチとは、立場を異にする捉え方が必要となることがわかる。埋め込み概念の再検討から見出された知見は、ネットワークやその他の要因のうち、どの要因が経済行為に影響を与えているかということ問うのではなく、社会的要因と経済行為との間の相互作用がどのようなものか、そのプロセスを問わなければならない、ということである。

Ⅲ. 組織フィールドとしての市場

新古典派経済学のように社会から独立した存在として市場を捉えることは現実的ではないと批判される。市場を社会関係のネットワークとして捉え経済的行為に影響を与える要因として捉えるものとして捉えることもまた、現実的な市場を捉える枠組みとしては不十分であることが確認された。

4) 栗本(1979)はポランニーの研究が非経済社会を対象にして行ったことが多いことと、このような枠組みを持って近代的な経済を分析した研究を行っていないことから、現在においてもこのような考えが当てはまるということを明確に示していないと指摘する。

経済社会学者が新古典派経済学で想定される市場を批判したのと同様に、経済学内部からの批判も多く存在するが、その問題点を詳細に検討したHodgson (1988)は市場を制度として捉えることによってその問題を克服しようとする。Hodgsonが示した新古典派的市場と制度としてみた場合の市場は以下の4つの点において明確に異なっている。

まず、市場という制度のもとで行われる交換は多様な制度的文脈のなかで行われ、どうじにその制度的文脈と相互に作用する。そのため、新古典派経済学のように純粋に市場なるものだけを取り出して分析することには欠点がある。他の社会制度との関係を捉え、かつそこで行われる交換がまた社会制度に作用する、その時間軸を射程に収める必要がある。次に、市場は個人の行為に対して制約を課すと同時に、個人のある行為を可能にする機能を持っている。新制度派経済学が想定したように「自由な市場」と「それを制約する制度」という二分法は、市場それ自体をひとつの社会的な制度として捉えた時点で成立しなくなる。第三に、二分法の否定とも関連するが、市場が社会的制度のひとつであると想定することによって、市場的交換は純粋に個人的選択を行う個人像が否定される。最後に、制度としての市場は情報を伝達し、個人の選好、期待、行為を形成し、型にはめるという点で大きな役割を果たす。そのため、市場におけるある取引の慣行や規則性が現れることとなる。このことは、市場における交換が自由では必ずしもないことを示している。

上記のような制度としての市場の特徴を導き出すために、自身が「折衷主義者と呼ばれてもかまわない」と述べているように、Hodgsonは経済学のみならず多様な学問領域を参照している。社会学における制度論の考え方は、この制度としての市場の捉え方とほぼ同様の主張を行っている。盛山(1995)は市場が個人の行動を規定するだけのものではなく、市場を通じてこそ、新しい需要や生産物、生産方法、技術を生み出していく機会を提供していると主張する(p. 12)。したがって、制度としての市場という視角は、新古典派経済学のように個人を純粋に自由な個人として想定するのではなく、また、社会ネットワークから一方的に影響を受け、規定される個人でもない。制度としての市場によ

て、完全な自由はありえず、しかし制度があることによって多様な機会を与えられている個人を想定する。

Hodgsonはまた、市場という制度は多くの社会制度の内のひとつのバリエーションに過ぎないとする。市場のもとで行われる交換を市場的交換として定義し、それ以外を非市場的交換として区別することで市場と他の制度との違いを強調する。市場を他の社会制度の区別は設けるとしても、市場を説明する際に市場を成立させるための制度という形で、市場の背後にまた異なる制度を設定することによって説明するという方法も適切ではない。この論理では、社会ネットワークの説明が抱えたように、つまり社会ネットワークを規定する文化を背後に用意する、という説明と同様の論理に陥ってしまうためである。他の社会制度との関係の上で市場を捉えるということは、Hodgson が個人と市場の相互作用と時間軸を想定していたことに見られるように、決して静態的な状態を指すものではなく動態的なものとして捉えられる。この考え方に近い捉え方をするのが、Fligstein (2001) である。Fligsteinは近代に見られる資本主義的市場の成立を歴史的に作り上げられた制度として捉え、市場自体が所有権や統治構造、交換のルール（公式、非公式なものを含む）等の制度とともに成立するものであり、文化的・社会的な特定のルールが市場に参加する人々の間で統治（govern）するものが市場であるとする。市場は、このような制度アレンジメントのもとで初めて可能となり、制度アレンジメントは同時に参加者によって発展させられる。ここでは、文化的・社会的ルールが一意的に行為者の行為を規定するものとして捉えられない。ルールは行為者によって多様に捉えられうるものである。ある制度のもとにいる行為者は、制度化されたルールを用いて、具体的な行動伴いながら制度の意味を多様に捉えていく（井上、2011）。

制度論における市場のアプローチの主たる目的のひとつは、ルールに基づく行為を捉えながら、市場の制度化のプロセスを明らかにすることである（Fourcade, 2007）。ルールが多様に捉えられうるということが、動態的な市場の理解に不可欠な考え方であるが、この市場の動態を捉えるために有用とされ

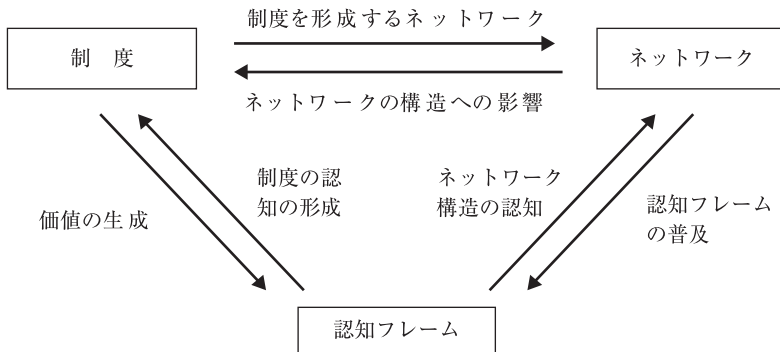
るのが、「フィールド」という概念である。

先にみた社会ネットワーク分析による市場の捉え方は経済的行為の説明の構造の問題や社会という範囲をネットワークに限定していたことの問題を抱えてはいるが、ネットワークという概念自体は否定されるものではない。というのも、近年の市場の社会学においては、社会ネットワーク分析の限界を指摘したうえで、フィールドという概念と関連付けることによって、ネットワーク概念そのものの有用性を示す研究が存在するためである (e.g. Fligstein, 2001; Fourcade, 2007; Fligstein and Dauter, 2007; Owen-Smith and Powell, 2008; Beckert, 2010)。

フィールドとは、行為によって社会的領域を構成する行為者群 (Fligstein, 2001) であり、市場における行為者は生産者や消費者だけではなく、供給者や政府機関、そのほか様々な行為者が存在する⁵⁾。ここで、行為者相互の関係はネットワークという概念で捉えられる。Beckert (2010) によれば、フィールドはこのネットワークの他に制度と行為者の認知フレームという3つの社会構造を統合する概念であり、3つの社会構造は個別に捉える事が出来ず、相互に関係している。そしてこの相互関係を捉えることによって市場のダイナミズムを捉えることが可能になると主張する。3つの社会関係の相互の影響関係を要約したものが図表2である。

5) フィールドという概念は、厳密にはブルデューの界 (champ) 概念と新制度派組織論における組織フィールド (organizational field) の2通りの考え方が存在しているが、共通点も多く、また後者が前者の知見を参照していることもあり、区別して論じることはなされていない。2つのフィールド概念の違いの詳細は、Fourcade, 2007および Owen-Smith and Powell, (2008) を参照されたい。

図表2 3つの社会構造の相互の影響関係(Beckert, 2010, pp. 612)



ネットワークは社会空間上の行為者の位置を示しており、それは制度によって影響を受けると同時に、制度を形成するために必要な資源を与えるルートともなる。行為者は制度的ルールに基づいて、ネットワークを形成する。市場をフィールドとして捉えることは、Beckertによれば、制度的ルールの普及によって、局所的に表れる秩序として捉えることを意味している。だが一方で、フィールドが秩序を捉える概念であることは、その動態を捉えられないということではない。それは制度化されたルールが同型化させると同時に、多様性をも生み出すためである（井上, 2011）。ルールはそれ自体行為者によって多様に捉えられるため、制度の持つ意味を特定し一意に行為を規定するものとして捉えることはできない。このように捉えるとき、Fligstein (2001) が主張するように、市場における競争は、捉えるうえで、多様に捉えられる制度的ルールに基づく自らの利害を達成しようとする。そこでは、自らの資源を利用しながら新たなルールの普及を試みたり、社会関係を新たに構築しようとするネットワークキングが行われる、政治的なプロセスとして捉えられる。市場の生成・変化は行為者の政治的な行為によって導かれるのである。

IV. むすびにかえて

以上、経済学的な市場の見方とは異なるアプローチをみてきた。社会ネット

ワーク論に基づく社会構造アプローチは、市場における社会的要因の重要性を指摘しながら、それを行うことに分析上の問題を抱えてきた。それを克服する可能性を持つものとして、制度として市場を捉えるというアプローチを簡単にではあるが、概観した。制度として市場を捉える際の鍵となるのは、組織フィールドやネットワークといった概念であった。これらの概念によって市場を捉えたとき、はじめに挙げた課題、市場における行為の問題や市場の捉え方自体が持つ問題を解決する可能性をもっていると考えられる。

本小論における制度論の論考は市場に関連するものに限られており、十分な検討とは程遠いものとなっているが、これは当然ながら多くの研究蓄積なされている新制度派組織論をより深く検討しなければならない。なかでも組織フィールドという概念についてもより精緻化し政治的行為へとつながるプロセスを明らかにしなければならない。また、具体的に経験的な調査に進めるとして、フィールドを捉えるにはどのようにすればよいのか、制度論における適切な経験的な調査とはどういった方法に基づくものなのか等を検討する必要がある。

参考文献

- Beckert, J. (2010) "How do Fields Change? The Interrelations of Institutions, Networks, and Cognition in the Dynamics of Markets," *Organization Studies*, Vol. 31, No. 5, pp. 605-627.
- Burt, R. S. (1992) *Structural Holes: The Social Structure of Competition*, Harvard University Press. (安田雪訳『競争の社会的構造 - 構造的空隙の理論』新曜社、2006年)
- Burt, R. S. (2001) "Structural Holes and Network Closure as Social Capital," in *Social Capital: Theory and Research*, pp. 31-56. (金光淳訳「社会関係資本をもたらすのは構造的空隙かネットワーク閉鎖性か」、野沢慎司編・監訳『リーディングス ネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本』、勁草書房、pp. 243-277.)
- Callon, M. (1999) "Actor-network theory- the market test," in Law, J. and Hassard, J. (eds.), *Actor Network Theory and after*, Blackwell Publishing, pp. 181-194,
- Callon, M. and Muniesa, F. (2005) "Economic Markets as Calculative Collective Device," *Organization Studies*, Vol. 26, No. 8, pp. 1229-1250.
- Dacin, M. T., Ventresca, M. J., and Beal, B. D. (1999) "The Embeddedness of Organizations: Dialogue and Directions," *Journal of Management*, Vol. 25, No. 3, pp. 317-356.
- Fligstein, N. (2001) *The Architecture of Markets: An Economic Sociology of Twenty-first Century of Capitalist Societies*, Princeton University Press.
- Fligstein, N. and Dauter, L. (2007) "The Sociology of Markets," *Annual Review of Sociology*, Vol. 33, pp.105-128.

2012年1月 矢寺顕行：組織論における市場概念

- Fourcade, M. (2007) "Theories of Markets and Theories of Society," *American Behavioral Scientist*, Vol. 50, No. 8, pp. 1015-1034.
- Granovetter, M. (1974) *Getting a Job*. University of Chicago Press. (渡辺深沢『転職—ネットワークとキャリアの研究』ミネルヴァ書房、1998年)
- Granovetter, M. (1985) "Economic Action and Social Structure: A Theory of Embeddedness," *American Journal of Sociology*, Vol. 91, pp. 481-510.
- Granovetter, M. (1992) "Problems of Explanation in Economic Sociology" In Nohria, N and Eccles, R. ed. *Networks and Organization: Structure, Form, Action*, Harvard Business School Press.
- Hodgson, G. M. (1988) *Economics and Institutions: A Manifesto for a Modern Institutional Economics*, Polity Press. (八木紀一郎、橋本昭一、家本博一、中矢俊博訳『現代制度派経済学宣言』名古屋大学出版会、1997年)
- 井上祐輔 (2011) 「制度化された新制度派組織論」日本情報経営学会誌, Vol. 31, No. 3, pp. 81-93.
- 石原武政 (2007) 「市場はいかに定義できるか？」商学論究, 第55巻, 第2号, pp. 25-51.
- 小橋勉 (2008) 「組織間関係論における埋め込みアプローチの検討—その射程と課題」経営学史学会編『現代経営学の新潮流—方法、CSR、HRM、NPO』文真堂, pp. 140-150.
- 栗本慎一郎 (1979) 『経済人類学』東洋経済新報社。
- Lie, J. (1997) "Sociology of Markets," *Annual Review of Sociology*, Vol. 23, pp. 341-360.
- Owen-Smith, J. and Powell, W. W. (2008) "Networks and Institutions," in Greenwood, R., Oliver, C., Suddaby, R., and Sahlin, K. (eds.) *Sage handbook of Organizational Institutionalism*, Sage, pp. 596-623.
- Polanyi, K (1957) "The economy as instituted process," *Trade and Markets in the Early Empires*. The Free Press. (玉野井芳郎・平野健一郎訳「制度化された過程としての経済」『経済の文明史』ちくま学芸文庫)
- Swedberg, R. (1994) "Markets as Social Structures," in Smelser, N. and Swedberg, R. (eds.), *The Handbook of Economic Sociology*, 1st ed, Princeton University Press, pp. 255-282
- 富永健一 (1997) 『経済と組織の社会学理論』東京大学出版会。
- 若林直樹 (2006) 『日本企業のネットワークと信頼—企業間関係の新しい経済社会学的分析』有斐閣。
- 渡辺深 (2002) 『経済社会学のすすめ』八千代出版。
- White, H. C. (1981) "Where Do Market Came From?" *The American Journal of Sociology*, Vol. 87, pp. 517-547.
- 安田雪 (1996) 『日米市場のネットワーク分析—構造社会学からの挑戦—』木鐸社。